

日本女子大学校の設立をめぐる —大阪設置案から東京設置案へ—

2019年11月2日(土)

於日本女子大学生涯学習センター

(日本女子大学名誉教授) 吉良芳恵

●はじめに

報告の課題：日本女子大学校の設置場所が大阪から東京に変更された過程を追う中で、成瀬仁蔵や広岡浅子等の思い、その意味を考える

日本女子大学校の設立：

当初は、成瀬仁蔵が洗礼を受け、梅花女学校の教師・校長でもあった大阪に設立する計画で、5000坪に及ぶ土地も確保されていた

→日清戦争後、1900(明治33)年2月14日の創立委員会で、東京での設置を決議、6月の創立委員会で、1901(明治34)年4月開校を決定

→1900年11月に岩崎男爵等が設置認可願を東京府知事に提出、12月24日に認可

→1901年1月、成瀬が日本女子大学校長として東京府知事から認可

→〃年4月20日に開校式

●資料

①『日本女子大学校四拾年史』(日本女子大学校、1942年)

※日本女子大学校の正史

②『日本女子大学校創立事務所日誌(一)～(四)』(日本女子大学成瀬記念館、1995～1997年)

※成瀬仁蔵の行動など、日本女子大学校の設立過程を記録した詳細な日誌

③『日本女子大学成瀬記念館所蔵 広岡浅子関係資料目録』(日本女子大学成瀬記念館、2016年)

『成瀬仁蔵関係書簡集 I』(日本女子大学成瀬記念館、2019年)

※日本女子大学校設立に関する広岡浅子や成瀬仁蔵の心のうちなどを示す、最も重要な一次資料

④『大阪毎日新聞』(原敬が社長)・『大阪朝日新聞』・『読売新聞』

※大学校設立にむけての社会的な動きを伝える

しかし大阪から東京への設置場所の変更における成瀬仁蔵の内声が聞こえない！

→『新修大阪市史』編纂過程で収集された諸資料(内海忠勝知事・住友家・大阪の教育関係資料など)の調査が必要

●成瀬仁蔵の大阪設置案

1896(明治29)年2月：女子高等教育機関の設立を説く『女子教育』を出版

1896年(カ)6月19日付の麻生宛成瀬書簡(No.12)：大阪設置の理由を記す

「大阪へ置くの理由及大阪人士の此挙を賛翼すべき道理は別ニ印刷ニ付し大阪人のみニ旨趣書ニ添へて与へる事ニ致度候」

「大阪ハ三府の一ニして日本第一の商業地…等ニして一の教育中心ヲ有せざる事…東京ニは帝国大学あり京都ニも…大学興らんとす…然るニ大阪ハ他の二府ニ劣らぬ財力を持ち乍ら日本の教育を意とせざる感ハなきや又教育ト〔ママ〕伴はざる繁昌の危き理由一大阪を文化スルニは教育中心トナルべき一大学を有す可き事…日本女子大学を大阪ニ得るは即ち一般教育の中心的を得る道理…また関西ニは完備女子大学校なき事…大阪ハ今日の富を有し日本の女子教育の父母国たるの希望はなき乎…富を有スルモノは天下の為ニ尽すの義務責任ある事…等を陳述したる檄文を草し之ヲ大阪府民ニ分ち警醒致度候。」

※京都帝国大学：1897年6月発足

↓

大阪市民にむけて「日本女子大学校設立に就て大阪人士に訴ふ」を！

※文章の起草は、同志社で教えていた麻生正蔵に依頼

「独り我大阪に於て未だ精神的文化の中心備はらざるは是吾人の遺憾に堪へざる所…。…女子大学校設立の如きは性質上民設事業として興るべきの必要あり。吾人は平生諸君が啻に日本帝国の実業の中心たるを以て自任せらるゝのみなら

ず、民設事業の発達上に於ても亦帝国の率先者を以て自任せらるゝを信じて疑はざるなり。是吾人が資本豊裕なるも未だ精神的文化の中心備はらざる大阪をトして民設事業の率先者たる諸君の賛翼を仰がんとする所以なり。…大阪に於ける精神的文化の中心の一たるのみならず、実に帝国に於ける精神的文化の中心の一たるべし。吾人乃素志又日本女子大学校の創設、帝国に於ける精神的文化の中心の一を造らんとするにあり、豈他意あらむや。」

↓

1897（明治30）年□月3日付の麻生宛成瀬書簡（No.71）

「先達ての大阪人士ニ訴る文ハもう少し大阪の人々ニ感動を予ふる又了解の出来ル様草すべしの談あり。故ニ暫く延ばし居申候。其ニついても御腔按置きを願度候」

※しかし『日本女子大学校四拾年史』では、「日本女子大学校設立に就て大阪人士に訴ふ」は1895（明治28）年に作成を委嘱したと記す。「京都には特に明後年を期して京都大学の設立を見んとするあるも」との表現から推定か？

●設置場所の変更：大阪案から東京案へ →年表参照

★誰が最初に東京説を主張し、その流れを作ったのか

- ・1898（明治31）年6月15日の項：東京説の最初か？

「麻生が中島力造を訪ふ。女子大学を東京に設置し…するの說出づ」

※中島は、同志社から米国留学、その後帝国大学文科大学教授（倫理学）

- ・〃年9月13日付読売：四ッ谷門外の学習院が移転後、同所を修繕校舍にとの説
- ・1899（明治32）年4月26日の項：土倉は位置問題に関しては創立委員の意見に依り最も適当なる場所に設立を…との意見
- ・〃年5月22日の項：発起中にも、大阪説（大隈・岩崎等）vs 東京説（渋沢）
- ・〃年5月30日付読売：東京の有志家は大阪に不賛成（大阪は女子教育に不適当な地、東京なら他校教師の兼任可能、帝国図書館や大学文庫あり）
- ・〃年7月1日～10月の項：東京女学館との合併談（辻新次、浅野総一郎の提案）
- ・1900（明治33）年2月6日成瀬宛広岡書簡：大隈・渋沢・内海・土倉等の意見に従うと
- ・〃年2月14日の項：創立委員会で決議、位置を東京に移すことに
- ・〃年2月18日付大阪朝日：女子大学創立委員会で、第一着手として近日東京に設置することとなりしよし
- ・〃4月10日麻生宛成瀬書簡：渋沢の両地同時施行説の意味？
- ・〃4月12日麻生宛成瀬書簡：三井の地面を得ることは西園寺・伊藤也大賛成
- ・〃4月16日付大阪朝日：大阪に設置の予定なりしが種々の都合で東京に設置
- ・〃4月16日麻生宛成瀬書簡：住友あたりの働により発起人丈でも纏めて…
- ・〃5月26日付大阪毎日：成瀬が数日前当地発起人を集め、大学の位置変更を謀る、予定の位置を変更するは土地の感情上遺憾少なからずと雖も此際東京に設立するは便宜上止むを得ることとし東京会議の議決を是認、東京設置に

★大阪の抵抗は？

- ・明確な動きはあったのか？その中心人物は？
- ・成瀬仁蔵の初心と教育の中央集権化

★広岡浅子の評価

- ・市島謙吉（衆議院議員辞職後、東京専門学校図書館長）の広岡浅子評
〔早稲田大学図書館蔵、市島春城学人〔撰〕『饒舌録 弐』写（自筆）、1902〕
「広岡あさ子は加島屋の分家広岡信五郎の細君である。日本女子大学を創立するころ此婦人か熱心に立働いたので大隈伯も遂に一肌ぬぐ様になつた。余の此婦人の名を知るのハこれからであるが大阪へ来て見ると実際良人よりも細君の方が重んぜられて居る。それは三井と云ふ金満家から娘に來たと云ふかどもあらうが実は男まさりな見識を有つて居るからであらう。両三日前逢つて見たが、半白の大束髪で小紋縮緬の扮装、頗る肥満のかからだで、年は五十位なるべきか、話しもテキパキとして居つて恰かも男子と応接する趣があり下田歌子にどこやら似て居るか彼れか如き忌味は毫末もなく聞けは三井三郎助の妹とやら、三井のことき素封家には珍らしき産物なり」
- ・広岡浅子像：「男のする事をしてはいけぬのか」という疑問に、「男女は脳力や胆力に於ては格別の相異はありません」という強い意志で、家父長制など封建遺制に立ち向かった